

京都府田辺町

稻葉遺跡第2次・興戸遺跡第7次  
発掘調査概報



1995

田辺町教育委員会

## 序

本書は、平成元年度に田辺町教育委員会が行いました開発にともなう緊急発掘調査の概要です。

稻葉遺跡は、住民のみなさんの待望久しきった中央図書館建設地の調査で、一方の興戸遺跡は、本町中央部を横断する国道307号バイパス建設にともない移設されることになった送電用高圧鉄塔の建設地の調査です。

本書が多くの方々の目にふれ、本町の歴史解明に役立つならば望外の喜びです。

最後になりましたが、調査にあたりご協力いただきました関係者の方々にお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財に対しご理解たまわりますようお願い申しあげます。

平成7年3月

田辺町教育委員会

教育長 吉山勝平

## 例　　言

1 本書は、平成元年度に田辺町教育委員会が実施した発掘調査の概要報告である。

2 調査の組織は次のとおりである。

調査主体・・・田辺町教育委員会

調査責任者・・・田辺町教育委員会 教育長 吉山勝平

調査担当者・・・同　社会教育課 鷹野一太郎

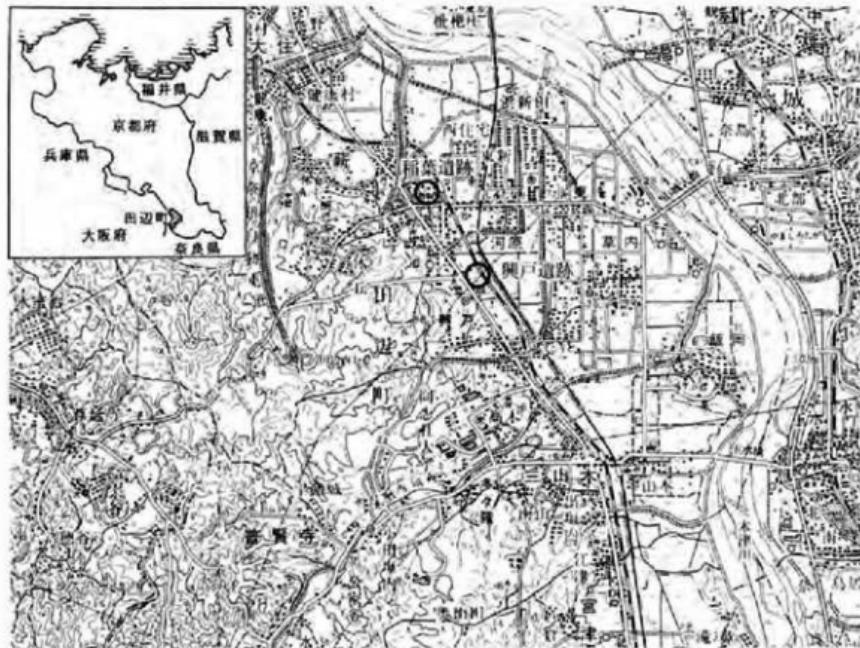
調査参加者・・・高城勝広・村田和弘・上村高宏

調査事務局・・・田辺町教育委員会 社会教育課

3 本書の執筆・編集は鷹野が行った。

## 目　　次

1 稲葉遺跡第2次発掘調査概要	.....	1
2 興戸遺跡第7次発掘調査概要	.....	5



遺跡位置図

# 1 稲葉遺跡第2次発掘調査概要

## 1 はじめに

稲葉遺跡は、田辺町中央部や北側の近鉄新田辺駅北西に広がる散布地で、南北約950m・東西約550mの範囲が想定されている。地形は南西が高く北東に向かい徐々に下がっていく。

京都府田辺総合庁舎建設にともなう調査で、平安時代前期（9世紀）の土器類が多くみつかり、とくに墨書き土器・硯（転用硯）・瓦などの一般集落でない官衙的な遺物が含まれることは注目される。

田辺町では、田辺町大字田辺小字辻40番地に町立中央図書館の新築を計画し、事前の発掘調査の運びとなった。

現地調査は平成2年2月15日から開始し、3月8日に終了した。

なお、調査にあたっては、町関係者の方々、調査に従事された諸氏、その他多くの方々のご協力をいただきましたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



調査位置図 (S = 1 : 10,000)

## 2 調査概要

調査地は、昭和61年（1986）まで田辺町の役場建物があったところで、調査地の西300mを北流する天津神川によって形成された扇状地上に立地し、遺跡の南東隅付近とみられる場所である。標高は約30mである。

調査は、建物予定地に幅3mの東西方向のトレンチを3本設定し行った。前述のとおり建物があったところであり、その建物建設の際の造成、盛土、攪乱がみられた。

1・3 トレンチの東寄り部分では現地表下0.5~1mほどで水田耕作が行われていた時の耕作土・床土層がみられたが、他の部分では造成時の削平を受けており、みられなかつた。この床土の下が遺構面とみられたが遺構・遺物ともみつからなかつた。他の部分では造成時の削平により攪乱を受け、遺物等みつからなかつた。下層では砂層・砂疊層が互層となり天津神川の氾濫によるものとみられる。





調査前全景  
(南から)



1 トレンチ  
(東から)



2 トレンチ  
(東から)

### 3　まとめ

調査地は、稻葉遺跡のなかでは高地に立地し、遺構等がみつかることが予想されたところであったが、思いのほか削平を受けており何らみつかることはなかった。

今回の調査は本町で初めての市街地の調査であったが、造成・削平をともなう市街地で、また天井川になる天津神川の氾濫場所でもあり、遺構面が削平あるいは氾濫による流失等が考えられる点で、今後の周辺での調査に参考になろう。

#### 《参考文献》

平良泰久「東新遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1977）』京都府教育委員会 1977（昭和52年）



調査地全景（手前3トレンチ 東から）

## 2 興戸遺跡第7次発掘調査概要

### 1 はじめに

興戸遺跡は、田辺町のほぼ中央部に広がる遺跡で、南北約900m・東西約500mの範囲が想定されている。

この遺跡の中央部を東西に横断するように国道307号バイパスの建設が計画されたが、路線上に関西電力の送電用鉄塔が1基存在する。このためこの鉄塔を路線外に移設することが必要となり、今回の調査となった。地番は田辺町大字興戸小字犬伏26番地である。

現地調査は平成2年3月12日から開始し、3月31日に終了した。

なお、調査にあたっては、関西電力株式会社をはじめ、調査に従事された諸氏、その他多くの方々のご協力をいただきましたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



調査位置図 (S = 1 : 10,000)

## 2 既往の調査

興戸遺跡は田辺町のほぼ中央部、西側の丘陵地帯から東側の平野部に張り出した台地上を中心に展開する南山城屈指の遺跡であり、遺跡地内の中央を奈良時代の山陽道を踏襲する府道八幡木津線が斜めに通る。府道を境に東側は一段低くなり、東に向けて徐々に地形は低くなる。

今回を含めこれまでに12回の発掘調査が行われ、各時代の遺構・遺物がみつかっている。縄紋時代晚期にはすでに生活が始まったものとみられるが、はっきりするのは、弥生時代中期以降である。古墳時代前・中期の集落はまだみつかっていないが、後期から平安時代までの集落がみつかっている。ことに8世紀後半から10世紀中葉にかけては、掘立柱建物跡群、府道八幡木津線に平行あるいは直交する溝・柵列、井戸跡などが二彩陶器、緑釉陶器、灰釉陶器、墨書き土器、錢貨、ガラス小玉といった一般集落ではない官衙的な有力者の存在をうかがわせるに十分な遺物とともにみつかっている。

田辺中学校南側で行った調査では、平安時代後期（11世紀後半）の双鳥紋瑞花五花鏡がみつかっており、有力者の墓に埋納されたものと考えられる。



調査前全景（西から）

### 3 調査概要

調査地は水田として耕作されているところであり、この中に $10m \times 10m$ の鉄塔基礎が入れられることになっていた。このためその $10m \times 10m$ の範囲を調査地として、実際には、湧水及びすぐ東側を走るJR線による振動等により壁の崩落が十分に予想されたため、 $9m \times 9m$ の範囲を人力により掘り下げた。

層位は上から耕作土・黄茶灰色粘質土(床土)・褐灰色砂質土(遺物包含層)・砂～砂礫層・黒色粘土・青灰色砂の順であり、周辺の調査から砂～砂礫層上面が奈良・平安時代の遺構面となるものとみられるが、遺構はみつからなかった。

この砂～砂礫層は水が大量に何回か流れた跡(洪水ないし流路)と考えられ、調査区全体に広がっていた。

遺物包含層からは弥生時代～中世にかけての土器類がみつかり、下層の砂～砂礫層では、その上面付近から古墳時代前期及び弥生時代の土器がみつかった。



#### 4 遺 物

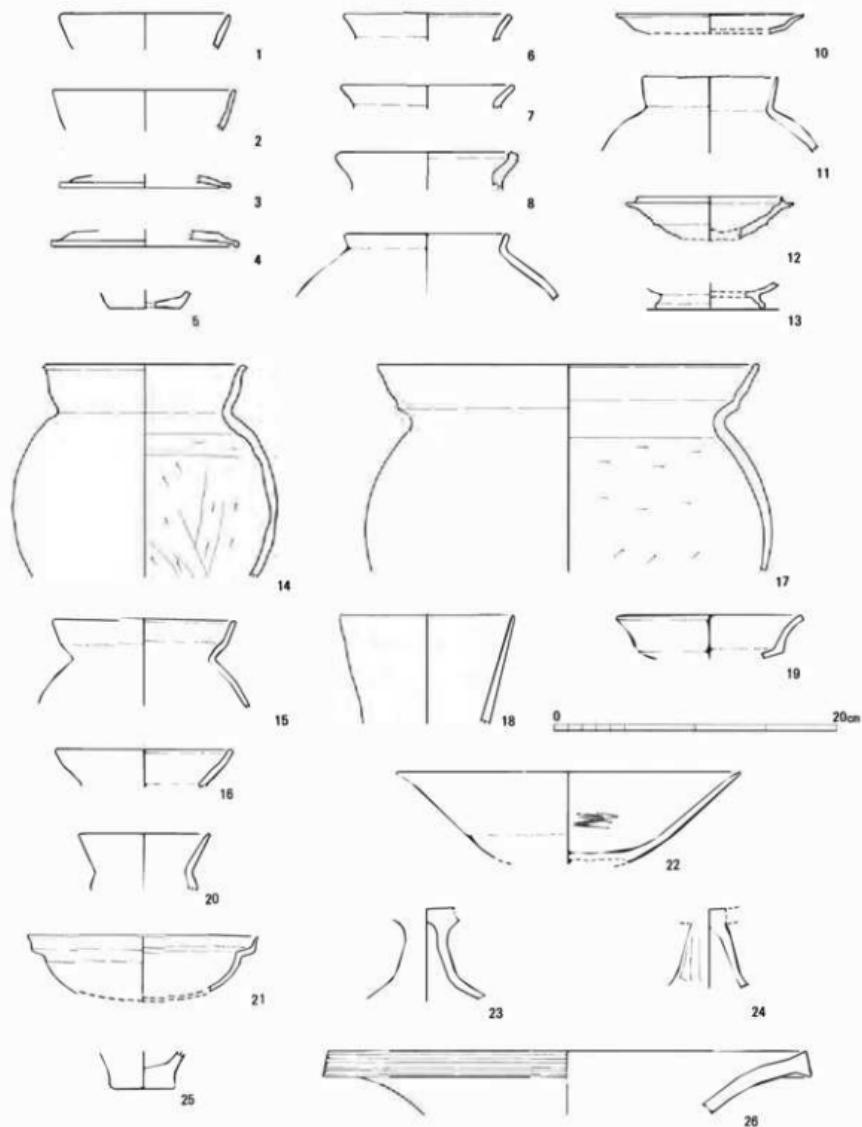
今回の調査でみつかった遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・製塙土器・瓦・灰釉陶器・瓦器・白磁・青磁・国産陶磁器などで、量的には整理箱1箱分である。時代的には弥生時代から近世にかけてである。

**遺物包含層の遺物（1～13）** 1～9はほぼ奈良時代に比定できる須恵器である。1・2は杯、3・4は杯蓋、5は壺の底部、6～8は甕の口縁部、9はいわゆる葉壺と呼ばれるものである。10は平安時代前期の土師器の皿。11は古墳時代後期に属す土師器の壺。12は同じく古墳時代後期の須恵器杯身である。13は平安時代の灰釉陶器碗である。ハの字に開く高台をもち、体部内外面に淡緑色のガラス質の釉がかかる。

**下層の遺物（14～26）** 14～24は古墳時代前期の土師器である。14～16は甕で、14は口縁端部をやや外方に肥厚させ、球形の体部の内面は上半部までヘラケズリがみられるが、凹凸が著しい。外面はナデで仕上げられる。15は口縁端部を内側に肥厚させている。体部内面はヘラケズリ、外面はナデがみられる。胎土には赤色粒が多量に含まれる。17～19は壺である。17はやや大型のもので、復元口径26.8cmを測る。口縁部及び頸部は横ナデ、体部内面はていねいなヘラケズリ、体部外面はていねいなナデで仕上げられる。口縁端部はほんのわずか内側に肥厚させる。外面は褐色、内面は淡褐色を呈する。山陰系か。18は直口壺で、直線的にのびる口縁部はそのまま端部を丸くおさめる。19は二重口縁壺である。ハクリのため内外面とも調整不明である。20はいわゆる小型丸底壺。口縁は斜め上方にのび、端部は丸くおさめる。体部径より口径が大きい。調整は不明である。21は小型鉢で、いわゆる小型精製鉢とよばれるもの。口縁は受口状に屈曲し、横ナデのため外反、端部は尖りぎみに丸くおわる。体部内外面ともていねいなヘラミガキが施されているものとみられるが、細かなヒビわれが表面全体にみられよくわからない。22は大型の高杯杯部。口径は24.3cmを測る。内面中位には細かなヘラミガキがみられる。外面は調整不明。淡茶褐色を呈する。23・24は高杯の脚部である。

これらの土器群は概ね布留式のなかでおさまるものとみられるが、そのなかでも比較的古い段階のものが多いものと考えられる。

25・26は弥生土器である。25は甕の底部、26は大型の壺の口縁部で、端部には3条の凹線がめぐる。



遺物包含層 1~13：須恵器（杯・1、2、12、蓋・3、4、壺・5、9、甕・6~8）

土師器（皿・10、壺・11）

灰陶器（碗・13）

下層14~26：土師器（甕・14~16、壺・17~19、小型丸底壺・20、小型鉢・21、高杯・22~24）

甙生土器（甕・25、壺・26）

遺物実測図



作業風景  
(南から)



遺物包含層除去後  
(西から)



下層据下げ風景  
(東から)

## 5 まとめ

今回の調査は、興戸遺跡でも水田耕作地で行った小規模のものであった。調査地の南15m付近での国道307号バイパス建設にともなう8次調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡群や柵列跡、銭貨（神功開宝19枚、万年通宝9枚）・ガラス小玉3点を納め、土師器盤をともなった土坑などが多くの遺物とともにみつかっている。

今回は奈良・平安時代の遺物はあったが、遺構はみつからなかった。この付近は建物等が存在しない空閑地であったか、8次調査地が付近での北限であったかと考えられる。

下層となる砂～砂礫層から多くの古墳時代前期の土師器がみつかっているが、土器量としては整理箱半分程の量ではあるものの、そのなかで高杯が15個体分は確認できること、小型丸底壺・小型鉢があることを考えると一般的ではない祭祀的な色あいがかなり強く感じられる。一方、15m南の8次調査地点でも、奈良・平安時代のベース層となる層からは小型丸底壺などが多くみつかっており、「何らかの行為（祭祀か）をした地点であったこと」としている。つまり、層としては西方からの堆積層ではあるが、みつかったのは層の上面付近であり、大水（洪水）などに対するまつりが行われた場所であっただろうことは想像される。

また、この層からは弥生時代（IV様式）の土器や生駒西麓産のいわゆる庄内甕の破片もみつかっている。今後の調査が期待される。

### ＜参考文献＞

- 伊野近富「興戸遺跡第6・8次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第42冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1991（平成3年）  
『田辺町埋蔵文化財調査報告書』

平成7年3月30日 印刷  
平成7年3月31日 発行

## 稻葉遺跡第2次・興戸遺跡第7次 発掘調査概報

（田辺町埋蔵文化財調査報告書 第13集）

編集・発行 田辺町教育委員会

〒610-03 京都府綾喜郡田辺町大字田辺  
小字田辺80番地  
電話 0774-62-9550

印 刷 明新印刷株式会社  
〒630 奈良市南京終町3丁目464番地  
電話 0742-63-0661